

井伏鱒二「遙拝隊長」論

— 二人の帰還者 —

鄭 寶賢

はじめに

「遙拝隊長」は昭和二十五年の二月に『展望』に発表された作品である。遙拝隊長とは当村大字笹山の元陸軍中尉岡崎悠一の事で、遙拝する事を好んで部下に東方を遙拝させていたので、そういう通称で呼ばれた。作品では何年の話か書かれていないが、執筆年から判断するに戦後四年過ぎた頃であろうと推測される。村人は悠一が精神に異常をきたすようになった経緯が分らず悠一を巡って色々臆説を流すが、村人の村松棟次郎の弟与十がシベリアから帰還する途中、汽車で小隊長悠一の従卒であった上田五郎曹長に出会い、マレー戦線であった事件について聞いて聞いていた。戦争は贅沢だと言った友村上等兵を悠一が殴っているうち、停止していたトラックが動き出し転落した事により、友村は死に、悠一は精神に異常をきたしたのであった。戦後、悠一を巡っての内地の話、戦地での悠一の事故の話、帰還者と十を巡っての内地の話と展開していく。

先行研究では、東郷克美氏の「まず主人公岡崎悠一が気違いとして書かれていることがもつとも重要だ。このフアナティックな軍国主義

者を狂人として書くこと、それにまさる痛烈な風刺はない。」⁽¹⁾という論を始めとし、戦争への強烈な批判のある作品として論じられてきた。東郷氏は戦争へ加担した庶民も忘れてはいけな⁽²⁾と言記し、相原和邦氏は井伏の複眼的視点を指摘するものの、「反日常的世界が展開してくる可能性をこの作品は充分に孕んでいるのに」、その手前で追求が終っていると指摘している。氏はその理由を、次のように記している。

先に、村人たちもまた上田をはじめとする進歩主義者や主人公悠一が存在によつて相対化されていると読み得る側面について指摘した。(中略)しかし、そういう相対化の方向について作者はどこまで自覚的なのだろうか。むしろ、作者は、登場人物に下駄を預けて相互批判的言辞を語らせるのみで、作家としての追求に筆を進めず、混在した要素のそれぞれを人間模様として投げ出して見せるに止ま⁽³⁾つているように思われる。(中略)しかし、ここで作者は、そのような複眼的視点に立っているように見えて、その実、相互の立場の徹底的対決をすり抜けて、結局のところ、村人たちの価値観に依拠し、これによつて事態を收拾している点に

問題があるのだ。(中略) 少なくとも、この村人のセリフに続いて、ただちに「さうして与十に墓参の決心をさせた」という地の文を置き、その方向に話を展開させている作者は、この問題を十全の重さで取り上げているかどうか、疑問なしとはしない。

相原氏は、井伏が「複眼的視点に立っているように見えて、」実は「村人たちの価値観に依拠し、それによつて事態を收拾して」いつたと論じている。これに対して前田貞昭氏は村人たちの行動の結果が村人への批判として帰ってくる円環構造であると反駁している。³⁾

以後、村人の姿へ焦点を当てて論じられるようになり、吉田永広氏が「悠一と村人(庶民)と」の対立関係を「柔かく包み込んで」いる「庶民の知恵」を読み落としてはいけないと記している。⁴⁾ 佐藤義雄氏は「民衆の健気な頑張りが」「支配機構によつて、国家と戦争へとまとめ上げられていく(制度)のあり様」がさりげなく描かれていると論じ、一方遠田勝氏や河崎典子氏が村人の加害者的な側面を指摘し、河崎氏は特に与十の「言葉」が村をこわすと論じている。

相原氏と河崎氏の論は、与十への見解が相反しており、与十の位置についてはより詳しく分析する余地があるろう。テクストは外地からの帰還者と内地の村人との対立構造となつてゐる。今まで「遙拝隊長」は発狂している元軍人の話に多く焦点が与えられた感があるが、悠一と共に、重きが置かれてゐる与十の作品での役割をも考え、井伏は戦争をどの位置から複眼的に語ろうとしたのか明らかにしたい。二人の帰還者が村のシステムに入っていない所で作品が終つてゐる事から、事態が村人の価値観に収束していくのを警戒して書かれた作品である事をも考えてみたい。特にこれまであまり論じられてこなかった与十

は、村人との徹底的な対決もないし、セリフも多くないものの、鋭い洞察力を持つ言葉を発している重要な人物である事に注目したい。

一、変化する村の表層と悠一

井伏は「遙拝隊長」を書いたきつかけを次のように語つてゐる。

戦争帰りの頭のおかしい曹長がいて、発作を起すと、棒片れを持つて、九十九里浜に行つては、突撃進めとやつて、まだ戦時中と思つてゐるらしいという話を聞いて、これを材料にしたもの。⁵⁾

こういった「頭のおかしい曹長」が悠一のモデルとなり、井伏は「性格や戦地における行動は、私が徴用されてマレーで見た某指揮官のそれを意識的に取り入れた」といい、悠一に井伏の戦地における上級軍人への怒りや嫌悪が、重ねられてゐる。前田氏の言う「許しがたい悪」を持つていた人物として悠一は描かれてゐる。が、悠一は村の封建的ヒエラルキーの体制の犠牲になつた人であり、相原氏のいう「復讐」をしていて、「氣違い」に対抗できない村を攻撃してゐるとも受け取れる。即ち、テクストは嫌悪すべき「軍国主義の亡霊」である悠一という人物を作り上げた村をも告発してゐるのである。

悠一が小学校に上がった年、父親が過労と貧困による栄養不足のため死に、後家になつた母親は貧困と村の蔑視の中で海岸町の旅館で住み込み女中をしてお金を儲け、「相当の資力をかけ」て門柱を立てるようになる。村長と校長は、「門柱は非常に見事だと誉め称へ」ながら、悠一一家が「模範的な一家」であるといい、悠一を幼年学校に推薦する。幼年学校への進学は、軍国主義の時代に出世を意味すると悠

一の母親は思い込み感激する。が、実際「そのころは大陸戦争が拡大して、軍関係の学校は莫大もない数で生徒を入学させてゐ」て、村長や校長は「学童たちが受験するやうに推薦制度で応募させる」ようにという軍当局からの命令により、村から蔑まれていた母親の心理に付け込み、悠一を幼年学校へ勧誘しただけであつたのである。

悠一を幼年学校に勧誘しに来た村長は、お世辞に鉄の鎖で出来ている釣瓶の響きを鶴の泣声に例えたので、悠一の母は釣瓶の音を聞かせるために必要以上水を汲んでいた。が、戦地に行つた悠一は「びっこ」となり、脳を煩つて帰つてくる。

悠一の母の辞退にも関わらず、悠一を退院させて村に連れ帰つたのは、将校が村に帰ると鼻が高くなると思つた、戦中の村人であつた。従軍中悲劇的な事故にあつた悠一はそのまま精神の時計が止まつてゐる。悠一は、「いまだに戦争が続いている」と錯覚しており、軍人として振るまい続ける。敗戦直後、余所から野菜の仲買りに来た二人の青年は、戦中の軍用語に怖じけづいて、悠一の発作から逃げたが、戦後しばらくすると、炭を買出しに来た海岸町の青年は、悠一を「軍国主義の亡霊ぢや、骸骨ぢや。」、「侵略主義のへうろくだま」だと貶める。

敗戦を境に国家の体制に合わせて軍国主義から民主主義へすんなりと方向転換した村人たちは、戦争中は悠一の事を気が狂つてゐると思わなかつたが、戦後は軍人として振舞い続ける悠一の言動を狂人の発作として受けとめるようになる。そして、その原因について様々な臆説を楽しんで、根拠のない説を定説化していく。「びっこ」になつた経緯について一切言わない悠一を、戦前は謙譲であると言つていたの

が、戦後には大げさな滅私奉公の口ぶりが原因で喧嘩して「びっこ」になつたと噂し、また発狂の原因についても「戦地での悪疾に感染」したとか、「親譲りの梅毒」であるとか噂し、「親の因果が子に報ふ譬えばなし」とまで言うようになった。

村人の姿について白石喜彦氏はその意識は戦中、戦後も変わらないと説明し、遠田氏は「無節操・無反省」と論じている。一方、渡辺善雄氏は「順応主義」と論じ、相原氏は「浅薄な転向」と説明しつつ、同時に気の狂つた悠一をあわれみかばつていく村人の姿を「温情主義」とも説明している。

「氣違い」を受け入れ包み込む、寛大で暖かい村人であるようにも見えるが、その実、時代状況にたくみに乗じながら、その場その場のエゴイズムで何もなかつたように事態を收拾していく日常もあつたのである。そこでは、かつて軍国主義の体制に全身全霊で忠誠を誓つたあまり、戦後の変化に信じられない悠一のような人物は、村の方向転換に翻弄される被害者となる。

二. 変わらない村の深層と与十

戦中、悠一という外地からの帰還者を受け入れた内地の村人は、戦後もう一人の帰還者と与十を迎える。

これまで、この与十についてはあまり論じられてこなかつた、わずかに河崎氏が「戦後民主主義」を背負つた与十こそ、部落の「異人」になつて次のような役割をしていると論じている。

軍隊でも、兵隊達が普段は方言を話していたように、二つの言葉

は上下の階層性を持ちながらも、同時に存在することができたのである。それに対し、与十の戦後民主主義を背負った標準語は、平等の名の下に人々を「均一化」（無個性化）し、笹山村のヒエラルキー自体を無化してしまう力を持っているのだ。そしてその新たな標準語を話す与十の口からは、悠一の戦地での過去がおいおい明らかされていくはずである。表面は何も変わらないかのようで、確実にどこかがこわれてゆく。当村大字笹山をこわすのは、他ならぬ「言葉」なのである。

氏は与十を言葉という表象を軸に論じていて、与十が村を壊している」と論じている。しかし、作品での与十の役割はもつと詳しく分析する余地がある。戦後になっても祖先崇拜の伝統等、その深層において変わらない村は、帰還者が共同体のシステムに従わないと「異人」扱いをする。すべての構成員を自分たちの体制に合わせようとする強引な姿が与十の扱い方を通して現われてくるのである。

与十は同年輩である悠一のマレーへの出征より先に奉天に移住し、シベリアに抑留されて帰還した。帰還当日兄棟次郎が無事帰還を先祖累代に知らせるため墓参りをしようと誘うと、与十はソ連風の共産主義に同調していて、「すべての宗教を否定する」と言い、「封建時代の残滓であると同時に宗教的に画一された姿を持つ墓」に参れないと言

う。
「まあさう云ふな、郷に入れば郷に従ふぢや。云ふことをきかん
と、嫁に来るものなくなるよ。とにかく、墓参せんといふ法は
ない。」

一方、新宅さんも与十に云つた。

「与十さんは、ソ連の地の郷に入り郷に従つたから、自分の郷に
帰つて郷に従へんわけがなからう。人間の生涯には、素通りせん
ければならんものが、なんぼでもある。でも、よく帰つて来た。
みんな心配して待つてをつたよ。さあ、お詣りに行かう。」（24
〜25頁）

棟次郎は隣人橋本屋の優と新宅の松の字に協力してもらつて与十を
墓参りさせる。新宅は与十に「心配して待つて」いたと暖かく歓迎す
るが、実は与十を社会主義に染まっていると思ひ、抑留の体験をお詣
りを通して捨てるように強制しているのである。所謂「被洗脳者」と
して扱い、自分たちが守つて来た通りのやり方に従うよう、方向転換
を強制しているのである。

与十は、時流に乗つた、浅薄な思想を持つている他の人物と違つて
正確な眼差しを持つている人としても描かれている。与十は悠一のマ
レー出征より先に笹山を出たので悠一の事故の事は知らず、帰還中汽
車の隣に坐つていた悠一の従卒上田曹長から話を聞く。悠一が大嫌い
であると言う上田元曹長は、悠一が気が狂つていなかつたらまっさき
に転向するだろうと予想しているが、それを受けて与十は次のように
説明する。

「君に、悠一ツつあんのうちの、コンクリートの門柱を見せてや
りたいな。あれを見なくつちやあ、悠一ツつあんの正体は、掴め
ない。門柱のてつぺんに、色硝子のかけらを植ゑつけてゐるんだ。
尤も、それは悠一ツつあんのお袋の考案ださうだ。」（23頁）

与十は上田に門柱を見ない限り悠一の正体は分らないと言う。上田
が悠一の狂信的軍国主義者としての表面だけを見ているのに対して、

与十は悠一が村長や校長、村人、母等が作った村のヒエラルキーの所産であったことを把握しているのである。その面では、与十は作品の中で唯一悠一の出自と育ちの意味を理解している人物である。

与十一行はお詣りに行って、墓石を兵卒と見做しベルトで殴りつけている悠一に出会う。与十一行の「式典」が終る頃、悠一が近づき号令を発すると、与十たちは寛大に悠一の号令に従う。橋本屋は供え物として持っていた饅頭を悠一に上げる。悠一は「恩賜のお菓子」であると感泣し、四人に東に向けて遙拝をさせてからちぎった饅頭を小粒の団子にひねって皆の口に入れ、残った饅頭は自分が頬張って食べた。母親に捉えられて悠一が去って行くと、四人は餡の溶液で汚い色の唾を吐き出す。

「どうも、氣しよくが悪い。きたならしい手で、餡を丸薬にひねるもんだからなあ。しかし、訓辞はうまいもんどや。ちよつと、本当に恩賜の菓子を貰ふときのやうな気がしたなあ。声涙ともに下るといふ演説ぢや。―光榮、これにすぎたるは無し、か。」

「ばかな、みんな、あんなものだ。みんな氣違ひどもの、お芝居だつたんだ。長靴男の、唱歌だ」と、与十が云つた。(28頁)

与十たちの墓参りで大騒ぎを起した悠一の言動を、橋本屋は「うまいもんどや」と感心し、その演説を褒める。それについて与十は悠一に対してではなく先の戦争一般に対して批判をしている。戦争を巻き起こした軍国主義体制の権力側への怒りから、戦争が「長靴男の、唱歌」であつたといっている。これは村の誰も指摘していない。

「お互に摩擦せんやうにしてくれ。尤も、わしの方は空気がから、何の手応へない筈やなあ、興奮しては、いかん。お前、いま悠一

ツつあんを見て、興奮したんやらう。」(28頁)

棟次郎は与十の国家に対する怒りへの理解を拒否し、与十と悠一との関係において、お互に摩擦しないようにと言う。自分は「空気」だから何の手応へがないという話は、与十が突っ込んできても棟次郎は摩擦を起さないという意味あいの言葉である。これは一見諦念的に見える生き方であるが、実はこれが戦争に対して何の責任も感じない恐ろしい鈍感さの現れでもある。棟次郎は肯定的な意味で使つたのであるが、「空気」は決して肯定的とは言えない。

「あの骸骨か。あれよりも、さつきの黒い唾の方が、まだ暗示性に富んでゐるね。」(28頁)

棟次郎が与十を見て興奮したであろうと与十に聞くが、与十はそれよりも自分たちが吐いた唾の方が暗示性に富んでいると答えている。その唾は悠一が「恩賜のお菓子」であるとした饅頭の餡のせいで黒くなっている。読みようによつては「恩賜のお菓子」に「恩賜」という天皇の意味を重く取つて、天皇以下権力側の戦争責任を暗示しているようにも受け止められる。または自分たちが吐いた事から、軍国主義に加担した自らの責任に重きを置いて汚いと語っているのかもしれない。しかし橋本屋は「ところで、稲田村の、大森さんの分家の娘さんは、よい娘ぢやのう……」と、与十の縁談のところにはすばやく話題を変える。与十は戦争の問題を考えているが、橋本屋には与十を一刻も早く村の体制に安住させる事が大事なのである。それどころか、結婚を種に与十の共同体への同化を強いている。会話の食い違いは続いて、与十は自分の考えに浸つていたのであろうか、兄の池の桶を抜く当番を代わりにしてくれという要求には返事せず、上田曹長から聞いた、

悠一が戦地で俚謡を歌ったという事を思い出し、その話をする。

「ハツタビユラ池の、＃往んでやる往んでやる＃といふ歌、ちかごろ、割合ひに有名らしいね。悠一ツつあんも、南方へ行く輸送船のなかで、いつもあの歌をうたつてをつたといふことだね。兵隊の素人演芸大会があるたんび、あれをうたつた……」（29頁）

悠一が墓で与十たちを東方遙拝させた方角は、偶然にもハツタビユラ池であった。ハツタビユラ池は笹山部落の背後の山窪にある池で、子供が池のほとりで草刈をしながら歌つたのが「往んでやる」という俚謡であった。与十は遙拝好きの悠一が戦地で郷土の童謡を歌つたという事に意味を置いて考える。悠一に滅私奉公を果たすようにしたのは国家の体制であり、俚謡を歌う悠一の魂は純粹であったらうと与十は思つたのかもしれない。帰還者二人の心には、たやすく方向転換する現在の村ではなく、純粹な心で俚謡を歌っていた幼年時代の村が憧れとしてあつたのかもしれない。

「いや、もうよいわ与十、樋はわしが抜く。悠一ツつあんが、南方で歌をうたつたのが、お前は満州やシベリヤにゐてもわかるんか。あの凝りかたまりの滅私奉公が、あんな子供の歌をうたつたら見ものやね。（後略）」

棟次郎は話を反らされたと心得て、気まづさうにむくれて見せた。舎弟を甘やかし放題には出来ないもので、ちくりと威のあるところも見せたのである。兄貴として貫禄にもかかはることだらう。

（29頁）

兄棟次郎は弟を子ども扱いで治めようとし、弟の戦中戦後の経験を無視しようとする。海岸町の青年から罵られた時には悠一を庇った棟

次郎であつたが、悠一が戦場で俚謡を歌つた事を与十から聞いても、満州やシベリアに出征していた与十がどうやってマレーにいた悠一の事が分るのかと、怪しむだけである。与十に話を反らされたことへのはらいせからか、「あの凝りかたまりの滅私奉公が、あんな子供の歌をうたつたら見ものやね。」と皮肉を云う。今の村人には俚謡は「あんな子供の歌」ぐらいにしか思えないのである。与十が上田から聞いた事情を、村人に伝える場面はない。

村人は故郷に戻つた与十をソ連の共産主義に影響されて帰つたと思つて、与十をそのままでは受け入れようとせず、村のシステムに従う事を強制する。これは与十の立場からみれば、自分の存在の否定に繋がる悲劇であつたであらう。

作品は与十の帰還当日で終つていて、与十が笹山という部落にその後も「異人」の姿で生きていくのか、村人になつていくのかは分らない。が、与十と棟次郎らの噛み合わない会話を通して、戦争責任への村人の鈍感さ、村の変わらぬ因習的な日常が暴かれている。これは戦争を再び起す事になるかもしれないその精神的風土を警告しているとも考えられる。

村人は村長と校長が悠一を幼年学校に推薦するなど、戦争に協力した事への責任を問わない。また悠一のような人物を育ててきた国家体制への批判もしない。ましてや自分たちが戦時体制へ加担した事への責任も感じていないのである。

「まあ、さう云ふな。戦争中だと思つたら、お互に我慢できんこともなからう。戦争中には、散々にきかされた言葉ぢや。お互によくきかされて来た間がらぢやないか。」（8頁）

笹山に炭を買出しに来た海岸町の青年が、悠一の軍事用語を使う発作に大変怒り、それを橋本屋が戦中だと思つたら我慢できると説得をする場面である。村人は戦争が台風や地震等の自然災害であつたかのように素通りしようと思ひ、戦争に協力した自分たちに責任があるとは思つてない。

作品の最後の場面には、悠一の母が釣瓶を手繰り、甲高く部落中に響き渡る風景が描かれている。悠一の母は戦中には誇りをもつて必要以上に水汲みをしたのに、戦後は寂しく、いや村への恨みを示そうとするかのように水を汲んでいる。戦前釣瓶の音は鶴の鳴声とされたが、戦後は村人の耳を突き刺し、心を突き刺す音を象徴しているかのようなのである。

村人の臆説好きな面や、戦中、村の鼻を高くするために悠一の将校の地位を用いたこと等、こざかしくあくどい村人の面が語られているのは単なる人間性への批判¹⁾以上に、戦争責任に気付いていない村人の姿を指摘しようとしているからのようにも思われる。そのために井伏は悠一と与十を単なる狂信的軍国主義者や被洗脳者ではなく、村の現実の引き出し役として、重きを置いて書いているのである。村落共同体の閉鎖性に早くから目を着けていた井伏は、戦争の責任所在をはつきりさせないまま戦後を迎えた村が真の意味では戦争を精算しておらず、その封建性が戦争を引きずり、再び新たな戦争を支える可能性をはらんでいることに気付いているのである。

おわりに

敗戦直後、戦争を導いた権力体制への怒りが、「佐助²⁾」に露骨に現われていたのに対して、四年後の「遥拝隊長」では、戦争を引き起こした権力体制への怒りだけでなく、庶民を一方的な被害者としては捉えず、加害者としても考えて、複眼的視点をもつて軍国主義体制と、日本の村落共同体双方への批判に向かつている。

村人たちは国家の体制に合わせ素早く表面的に方向転換する。それにより方向転換できなかった悠一は、戦争中には模範的な学童、将校であつたが、戦後には狂人となる。

一方、村の深層にある封建的システムは依然として変わらない。戦争に加担したことを自覚せず、戦争を自然災害のようにやり過ごそうとする村人たちは、帰還者と与十を「被洗脳者」扱いする。与十の言動が村の危うい日常を写し出している。こうした村の精神風土が、再び戦争を引き上げる温床にもなりかねないことを、井伏は警戒しているのである。

作品の冒頭にある「こうちがめげる」もつとも大きな原因は、悠一の言動にではなく、実は当村大字笹山の村人にあるという「捻り」が存在している。「遥拝隊長」は、悠一を作り出した村、与十を迎える村の姿を通して、村人の事象を收拾していく場当たりの利己主義と、因習的日常を批判しているのである。

注(1) 東郷克美「井伏鱒二素描―「山椒魚」から「遥拝隊長」へ―」(昭和四十一年十一月『日本近代文学』第五集)(日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書井伏鱒二・深沢七郎』昭和五十二年十一月、有精堂所収)

(2) 相原和邦『「遥拝隊長」の構造と位置』(昭和四十七年九月『近代文

- 学試験』第十号)
- (3) 前田貞昭「遙拝隊長」の周辺―戦時下の井伏を視座として―(昭和六十年三月『岐阜大学国語国文学』十七号)
- (4) 吉田永広「遙拝隊長」(昭和六十年四月『国文学解釈と鑑賞』)
- (5) 佐藤義雄「屈託からの反噬―井伏鱒二の戦後文学・覚え書」(平成四年二月『文芸研究』六十七号)
- (6) 遠田勝「遙拝隊長」考―井伏鱒二における他者と共同体―(日本文学における(他者)』平成六年十一月、新曜社)
- (7) 河崎典子「井伏鱒二『遙拝隊長』論―「言葉」の戦争―(平成七年三月『成城国文学』十一号)
- (8) 伴俊彦「井伏さんから聞いたこと」(『井伏鱒二全集』月報、昭和四十年、筑摩書房)
- (9) 井伏鱒二「遙拝隊長」(昭和三十七年六月『週刊読書人』四二九号、『井伏鱒二全集』二十二卷)
- (10) 「はじめ私たちが大阪の兵舎に行つたとき、一ばん最初に指揮官の云つた言葉はかうである。
「愚図々々いふと、ぶつた斬るぞ……」誰もまだ何も云はないのに、いきなりそんな言葉を私たちに浴せかけた。みんなに興奮の気配が行き渡つた……興奮のあまり卒倒するものが一人あつた。「斬るなら、斬れ。」海音寺潮五郎がさう云つた。」(井伏鱒二「私の万年筆」『昭和二十三年十二月』『文芸読物』七卷十一号)、『井伏鱒二全集』十二卷)
- (11) 同注3
- (12) 同注2
- (13) 白石喜彦「庶民における意識の不变―「遙拝隊長」論」(昭和五十六年五月『井伏鱒二(現代国語研究シリーズ十二)』向学図書)
- 「すなわち作者は、わが国の庶民が戦中戦後を通じてその意識にわたるの変革をも加えていない事実に対して、ほろ苦い思いを吐き出してゐるのである。」
- (14) 同注6
- (15) 渡辺善雄「遙拝隊長」ノート(上・下)。(平成十二年六月・七月『月刊国語教育』)
- (16) 同注2
- (17) 河崎典子氏は与十について次のように記している。
「さらに、農村共同体の象徴でもあるような、『ハッタビユラ池』の池干しの『樋を抜く当番』をつとめようとはしない。これは村落共同体に受け継がれてきた慣習を否定することであり、引いては村への否定へとつながる。すると実は、『部落』にとつては、与十こそが悠一以上に『異人』たりえるのである。」(同注7)
- また村人の知恵を強調していた吉田永広氏は、与十について「悠一とは表裏の関係にあり、姿を変えた遙拝隊長でもある」(同注4)と被洗脳者扱いしている。
- (18) 遠田勝氏は村人の人間性について次のように論じている(同注6)。
「ここにあるのは『軍国主義将校』対『反戦庶民』という、きれいな図式ではなく、『山椒魚』『シグレ島叙景』に始まり『漂民宇三郎』に至るまで井伏が終生、飽くことなく描き続けた悲喜劇的ヴィジョン―同じ運命のもとで互いに争い傷つけ合わざるを得ない小人たちという構図ではあるまいか。そして、もしここに風刺が感じられるとすれば、それは人間性そのものに対する風刺なのである。」
- (19) 悠一の発作が狂言ではなく、村での浅薄な方向転換こそ狂言であり、悠一は狂言廻しとして、それを自覚していない村人に、国家の権力側へ加担した責任を想起させている引き出し役をしているのである。これは佐藤嗣男氏の言われる狂言廻しの「私」の系譜の一つと言つて良い。引き出し役が井伏の作品で見られるのは、一人称小説だけではなくて、こういつた三人称小説においてもある。「ナレーター狂言廻し」について佐藤嗣男氏が次のように論じている。(『井伏鱒二―山椒魚と蛙の世界』(平成六年三月、武蔵野書房))
「井伏は、朽助が心を許す(私)をナレーターとして設定すると同時に引き出し役として登場させることで、―いや、井伏は言つてゐる、『私』が出てきても、私小説じゃないやね。『私』は狂言廻しなんだし」(伴俊彦「井伏さんから聞いたこと」その一、筑摩書房版『井伏鱒二全集』第三卷月報3、一九六七・四)と。狂言廻し、―岩波書店刊の『広辞苑』(第三版、一九八三)をひいて見ると、「歌舞伎狂言で、主人公ではないがその狂言の進行に重要な役割をつと

める役柄」とある。井伏作品における「私」は主人公でもなければ、まして作者その人でもない。作品の進行に重要な役割をつとめる役柄を担っているのである。(中略)それはまさに、単なる引き出し役にとどまるのではなく、さらにつけ加えれば、単なるナレーター(語り手)にとどまるのではなく、《ナレーター兼狂言廻し》として位置づけられる、井伏文学特有の登場人物の出現であった。」

(20) 「佐助」の所収は、昭和二十一年十二月鎌倉文庫『佐助』で、以後『定本佐助』が昭和四十五年二月青娥書房から出ている。東郷克美氏は敗戦直後の作品昭和二十一年の「佐助」について次のように論じている(同注4)。

「佐助」は『生類憐みの命』の犠牲者からみた権力組織の中に生きる役人の愚劣を描いて(中略)私には戦争と軍人の愚劣さに対する憤りが下敷きになっているとしか思えない。(中略)そして犠牲者である罪のない庶民。」

〔付記〕 本文の引用は『井伏鱒二全集』十四卷(平成十年六月、筑摩書房)により、傍線、傍点は私に付した。

(ちよん ぼひよん、広島大学大学院博士課程後期在学)